

# ステビアの栽培法確立に関する研究

(第3報) 生育経過と成分の推移について

上妻道紀・江畑正之

(鹿児島県農業試験場)

本県におけるステビアの栽培は、昭和50年に一般農家に導入栽培されて以来、年々増加の傾向にあり昭和53年には約100haに及ぶ。栽培に当っては、解明すべき問題点が多いが、生育の経過、収量、甘味成分（ステビオサイド）の时期的経過を調査することは、収穫時期を決定する上で極めて重要な要素であると考えられるので、昭和52年度の成績を中心に報告する。

## 試験方法

(1)栽培型：新植，1年株。(2)栽培密度：うね幅60cm，株間20cm。(3)調査時期：6月上旬から9月下旬まで月2回調査。(4)調査個体数：10個体の1区制。(5)成分含有率の測定：高速液体クロマトグラフ。(6)施肥量(kg/a)基肥：たい肥150，苦土石灰8，化成肥料(10:16:16)10，追肥：NK化成(16:16)31，一番刈後施用。

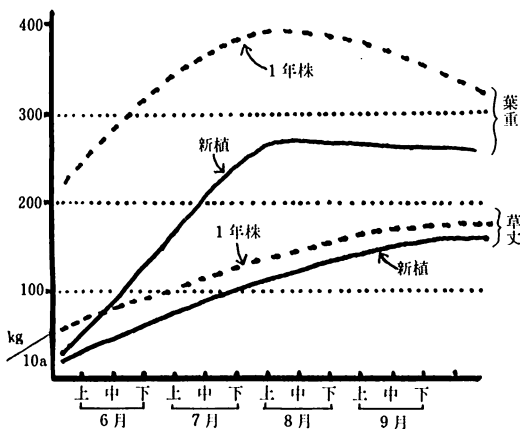
## 試験結果および考察

(1) 草丈，分枝数の推移，新植での草丈の推移は，5月中は，やや緩慢であるが，6月以降，急速な伸長がみられ，開花期の8月一杯まで伸長がみられる。また栽培型では，新植より株出の方が早期から，伸長がよく繁茂量も多い。

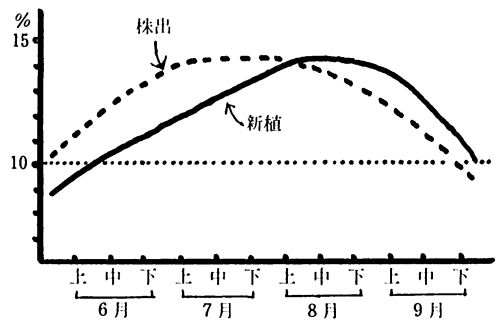
次に一次分枝数ならびに，分けつ数の推移は，新植の場合，6月から7月にかけて発生が多く，株出の場合は春先に萌芽した茎がそのまま，収穫期まで残り，生育途中での分けつの発生は，ほとんどみられず，新植と異なった生育相を呈する。

(2) 風乾葉重の推移については第1図に示すとおり新植，株出いずれも8月上旬頃まで増加するが，1年株では，9月中旬以降，枯死葉が多くなり，減少する。新植では，10月中旬まで平衡状態を保ち，10月下旬になると，枯死葉が多くなり減少する。また二番刈では，一番刈を早くしたものほど再生力が強く，葉重も高い値を示した。

(3) 成分含有率の推移は第2図に示すとおり，新植では8月上旬（花蕾発生期頃）に最高に達し，その後9月上旬まで平衡状態を保ち，9月下旬以降減少の傾向にある。一方1年株では，新植より早い7月上旬には最高に達し，8月中旬以降やや減少の傾向にある。また二番刈での成分含有率は，7月上旬までに一番刈すれば，一番刈の成分含有率と大差ないが，それ以降一番刈の刈取時期が遅れるにつれて減少する。



第1図 草丈風乾葉重の推移



第2図 成分含有率の推移

以上，草丈，分枝数，葉重，成分含有率の推移について述べたが，これらの生育経過を踏えた上で，肥培管理なり，収穫期なりを決定すべきであろう。